

平成25年度 第1回次世代大学力強化推進会議 議事要旨

日 時 平成26年3月20日(木) 14:00~16:00

場 所 事務局 第1会議室A

出席者(学内委員)

山口総長、上田、新田、安田、川端、村田の各委員 計6名

出席者(学外委員)

荒金、内田、小砂、駒橋、塩田、丸山の各委員 計6名

出席者合計 12名

陪席者

行松URAステーション長、大山研究推進部長

議事に先立ち、山口総長から、国立大学法人北海道大学の状況、本会議への期待等について挨拶があった。

議題1 委員紹介 (資料1)

各委員から自己紹介が行われた。

【確認事項】

議長から、本会議の議事要旨について、本学のホームページ上で公開したいこと、議事要旨は、全体としての議事内容を総括したなるべく簡易なものを案として作成し、委員の了承を得たのちに公開したいこと、個々の名前や発言内容をそのまま出さない旨の発言があり、次回会議で了承後に公開することが了承された。

議題2 次世代大学力強化推進会議について (資料2)

大山研究推進部長から、資料2に基づき、文部科学省補助事業「研究大学強化促進事業」の概要、本学における当該補助事業の構想概要、事業推進に係る組織図及び本推進会議等の規程について説明があった。

議題3 北海道大学の概要 (資料3)

川端委員から、資料3に基づき、北海道大学の概要について説明があった。

議題4 北海道大学における研究力強化策について (資料4)

川端委員から、資料4に基づき、本学が取り組む具体的な研究戦略、研究力強化等に向けた構想について説明があり、おおむね以下のような意見交換があった。

- ・これまでの個別的な共同研究から組織対組織型の共同研究への方向性は良いと考えるが、他大学との差別化や特徴を出すという考えはあるか。
- ・フード&メディカルイノベーション(FMI)推進本部の運営委員会の過半数を学外者として、一緒に運営をしていくことで共同体制を作り、新しい産学連携の形を作ろうと考えている。

- ・共同研究制度には、企業から特任や客員で参画できる仕組みもあるが、知財も含め課題も多い。
- ・企業側でも小型の研究を散発で10年やっても成果が上がらないと実感しているが、一方、小粒でも良いテーマが段々出なくなってしまうことが少々心配である。
- ・「世界の課題の解決に貢献する北海道大学」は、とても良いコンセプトであるが、課題を解決するために、北大はどのような強みを出していくのか。外国人や女性を増やす、器を作るだけだと形だけに終わり、本質的な研究の質が変わらない感じを受ける。
- ・産学協同の場として、北大を活用してもらおうというメッセージを感じたが、企業にとって北大にはどのような魅力があるのか。
- ・北キャンパスに非常にタイミング良く、国の補助金により建物が整備されており、スペースの魅力は大きいのではないか。
- ・いかに魅力的な研究テーマを、大学としてコーディネート、マネージするか、そういった仕組みがあっても良いのではないか。最後はそこが魅力になる。
- ・組織を作り、副学長が一生懸命旗を振っても、実際に現場で動いてくれるのかどうか、非常に舵取りが難しい。企業として、共同研究をやっても、大学に対する違和感やずれ、思い上がりの研究、そういったところが先行してなかなか実になっていかない。そういう事をよく検討いただきたい。
- ・大学の基本として個々の教員のダイバーシティが非常に大事である。確かに個々の教員は自分のことしか考えていない場合もあり、そういう現状打破のために、つなぐ役をURAに果たさせようと考えている。
- ・大学は、これまでは一人一人の自主自立的な研究と産学連携とが混在したマネジメントを行ってきたが、これからは産学連携と研究のマネジメントの切り分けを行いたい。
- ・企業の研究マネジメントでは1年、2年という単位ではなく、例えば3ヶ月ぐらいで調整チェックをして見直しをかけていく。
- ・その部分がコーポレートガバナンスと大学のガバナンスとが違う所であり、企業の場合は、方向性をまず決め足切りもされるが、大学では、基本的にそのような事をやれないし、やってはならない。そういった発想が大学を支えてきた根本であり、崩す訳にはいかない。そういう違いを話し合った上でそれぞれの考え方を生かす仕組みを作っていきたい。
- ・大学がやる基礎研究の部分は絶対疎かにしないでいただきたい。企業の基礎研究はそういうことは出来ない。企業の基礎研究は、3年後、5年後、10年後に成果を出すという意味の基礎研究であり、会社の方向性と全く違うことをやることはまずない。大学の多様な基礎研究に企業は期待しており、そういうものがないと投資が回せない。
- ・研究大学強化促進事業の目標としては世界の問題解決などに貢献する、ということであるが、お金を集めたい、ランキングをアップさせたいということ以外に、共同研究をもっと大きくして成果を挙げていく等、色々な施策があるのではないか。
- ・確かにランキングや共同研究費の増加は目の前の話しであり、結局は大学の価値をどうやって認めてもらうかということである。社会的に大学の活動が見えるような形にどうしたら持っていけるのか、そこがゴールではないかと思う。

・最終的には価値をどこに持っていくかということだが、どんなターゲットを絞り、それを解決するためにどういう研究者を集めるか、ある程度明確にしておかないと進まないと思う。その意思統一がないと、結局は網羅的な小さい研究ばかりとなり、研究戦略性が全くない。そこをきちんとすべきではないか。自発的な基礎研究の方にこそ研究戦略が必要になると思う。

議題5 研究大学強化促進事業の平成25年度事業概要及び平成26年度事業計画について（資料5）

川端委員から、資料5に基づき、研究大学強化促進事業の平成25年度の事業概要及び平成26年度の事業計画について説明があった。

議題6 今後の研究力強化の方向性について（資料6）

議長から、「議題6」で予定していた「今後の研究力強化の方向性について」は、既に様々な議論がなされたため、改めて議題6の議論は行わないこととした。

議題7 今後の予定について

議長から、次回以降の本会議の開催回数や日程等に関して説明があり、今後はおおむね年3回程度の開催とすることが了承された。また、次回の開催日時等は、事務局から連絡・調整のうえ決定することとされた。

（ 以 上 ）